
壊れそうな現実の中で

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れそうな現実の中で

【Nコード】

N7301C

【作者名】

林檎

【あらすじ】

苦しみは目に映る世界をひどく狭くする。誰でもそんなこと分かっている。誰だって自分を大切にしたい。幸せになりたい訳じゃない。だけど穏やかでありたかった。

君はいつも自分の中にきつちりとした自分像を持っていて、それが少しでも崩れるととても嫌な顔をするよね？

君の中には自分の行動にも越えてはいけな一線があつて、それに少しでも踏み込んでしまったら、壊れるくらい後悔するよね？

今の君は自己嫌悪の固まりみたい。見ているこつちまで息苦しくなるよ。

何か言葉にしてみたつて、その全てが何の影響力もなく部屋の隅へ吸い込まれていく。

分かっているのに、君は次から次へクルクルと声音を変えては何秒か押し黙る。

別に喋らなくていいのに、と僕は思うのだけど、多分君はそうする事で何かを保っているのだと思う。

一体今日水を何杯飲んだ？

何度も何度もトイレへ行つて、まるで身体の中を浄化しようとしているみたいだ。

サプリメントなんか飲むよりも、ちゃんとしたご飯を食べてよ。

煙草を何本吸つた？

君はすごく滑稽だよ。

君を助けてくれるヒーローなんて、絶対に現れないよ？

君は大人だから、そんなこと重々分かつてる。

何かに縋ろうとしながらも、自分で抱え込むしかない事を誰より君が知つてる。

君は頭の良い子だから。

彼が君に何かしてくれただ訳じゃない。

これからも何も与えてはくれない。

彼は君をとても便利な女だと思ってる。

君は人より綺麗だから、そういう意味でもとても都合がいいのだと思っ。

君は利口だから、そんなことに気付かないほどぼんやりしてる訳じゃ無い。

自分を玩具にしたい訳じゃない。

君ほどプライドの高い女を僕は知らないから。

だけど僕が何を言ったって、彼よりも自分を責め続ける君が、このままだと自分を壊してしまいそうで僕はとても不安なんだ。

チラチラと携帯を見てるのも知ってる。

君の胸につかえた真っ暗な血液を、少しでも減らしてあげられたらどれだけいいだろう。

君がこんなに純粹で、真っ白な人間だということはどうやって彼に知らせればいいのだろう。

悔しいけど僕はその術を知らない。

君の歌声がとても美しい事を。

飾らない笑顔が無邪気な子どものように見える事を。

滅多に涙を見せようとしない意地っ張りな所を。

どうやって彼には伝えられない。

君が一度でも拒めば、彼は消えてしまう。

君はそれを恐れているの？

そのためにどこまで落ちていくの？

だけど君は全てを知っていて、寂しさに勝てない。

独りぼつちの君の部屋には孤独が渦を巻いて君を待ってる。

彼がそこにいれば少しでもそれが紛れるのかい？

だけど彼が消えた部屋には倍になった寂しさが待ってるんだよ。

全部、全部分かっていて、それでも君は孤独に勝てない。

そんなの悲し過ぎるよ。

泣いたらいいのに、僕の前でさえ君は泣かない。

「私って貴方の何？」彼にそう聞けばいいのに、君は聞かない。

これ以上みじめな女にはなりたくない、君は言って笑う。

そんな笑顔ちつとも綺麗じゃないよ。

僕にバレないように睡眠薬を飲んだ君は、鼻からすーっと息を吸い込んでゆつくりと口からはきだした。

それを何度か繰り返した後、諦めたように横になった。

『僕がここに居るから』

言うと、君は頷いて目をつむる。

僕では君の孤独を癒せない。

君が寝息をたて始めた時に携帯が鳴った。

薬の力で眠っている君は目を覚まさない。

僕は携帯を開いた。

ラインストーンに囲まれた君の携帯画面には彼からのメール。

五分間悩んだ後、僕は君の肩を揺すった。

化粧をして髪を整えた君は、鏡の中の自分を少し不思議そうに眺めた。

黒いワンピースに身を包んだ君は、息を呑むほど綺麗だよ。

いつ何を間違えたの？

そんな事、疲れた君は脳の裏側に隠して逃げてる。

漂う甘い香水の香りが君を飾って、細い足首が動いた。

「分かってるんだよ」

何も聞かない僕に、玄関先で君は言った。

金色のヒールがカツツとひとつ音を鳴らす。

振り向き様、今にも泣きそうな顔で僕に微笑んだ君は、背中を向けて足早に部屋を出て行った。

君が居なくなつた部屋には、本当は孤独なんて無くて、あるのは香水の香りだけだった。

それが悲しかった。

窓から見える真っ暗な空には星がひとつもなくて、なのに雨すら降らない。

こんな空の下で、一人きりで彼を待つ君が哀れで胸が痛んだ。

もしも満天の星空が広がれば、君がご飯を食べられるようになるかもしれない。ちゃんとした赤色の血が流れるようになるかもしれない。

そんな風に考えたら僕の目から涙が流れた。

窓を開けると初秋の風がふわりと流れ、枯れてしまったベランダの花を揺らした。

涙が茶色い花びらの上に落ちて、カサリと音を鳴らした。

君の吸いかけの煙草を口にして、ライターを擦った。

煙は君の匂いがして、少しだけ君の気持ちになれた。

網戸に吸い込まれていく真っ白なか細い煙は、星のない空へと立ち上ぼる。

秋が来て冬が来て、また夏が来て。いつまでも世界はそうやって回っていく事を、彼女に知らせるにはどうすればいいのか、煙と香水の香りの中で僕はぼんやり考えていた。

(後書き)

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。貴方がこれからも
穏やかでありますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7301c/>

壊れそうな現実の中で

2010年10月24日13時52分発行